
青い月の下で：夢幻螺旋

渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い月の下で：夢幻螺旋

【Nコード】

N6416Z

【作者名】

渚

【あらすじ】

夏の焼けつくようなある日、「彼」は幻想へと足を踏み入れた

少年はかつての思い出を取り戻すために記憶を辿る。
廃墟で見た幻は形を成して子供へと姿を変えた。
逃げる子供は知らない世界へと少女の手に導かれ、
真実を追う少年は堅牢たる屋敷の前へ、
運勢は逆転し、彼らを取り囲む風景は夢のように移り変わる。

対極する二つの世界、終わらない螺旋。

この世界は現実なのか？それとも誰かの見た夢なのか？

0、？（前書き）

この物語は「青い月の下で」という私が「四季風」というサークルで作っているノベルゲームの外伝です。原作者の私が書きました。しかし、そんなゲーム知らないよ！といっても全く問題ありません。なぜなら、この外伝は本編とはほとんどつながりが、ない！のです。一応外伝なので本編とつながっていますが、最後の最後まで読まないといけません。世界観は同じですが、雰囲気は180度違います。なので青い月体験版をプレイしたことない人でも一つの完結した別の物語として楽しめると思います。そして、外伝読んだから本編も〜とプレイしていただくと、あーこんなふうになったんだと気付いていただける？かも。ノベルゲームに興味がある方はぜひぜひ！

四季風ブログ<http://ameblo.jp/shikina>
gi/

もし感想がありましたら小説家になろうのユーザーさんの感想は下のフォームに、それ以外の読者さんはブログのコメント欄にお願いします。

0、？

0

真つ暗な場所をぼくはずつと走っていた。光りはどこにも見えず、行っても行っても闇しか残らない。そこはまるで明かりのないトンネルのよう。そのうち、ぼくは気付いた。ここは明かりがないんじゃない、たぶん何も無いんだってことに。周りの何もつかめないし、トンネルのように走る音も反響しない。気を抜けば、飲み込まれてしまいそうな暗闇。あるのは息をきらすぼくの全力疾走。そして、彼女を呼ぶ声。

「お姉ちゃん！」

けれど、返事がない。その代わりに聞こえるのは男の声だ。後ろから前から、一体どこにいるのかわからない声の反響。それは不気味でぼくをいつそう脅えさせる。しかも、その声は一体何を言っているのかぼくにはわからない。帰れ、わかるのはその言葉だけだ。帰れ、帰れ、帰れとひたすらぼくの心を痛みつける。心がきしむ。

『この闖入者 』

『あの子は帰った。君も行け 』

いやだ。痛みをはねのけ、全力でそう応える。こんなところで終わりたくない。彼女に会いたい。絶対に会いに行くんだ！

声に向かつてそう叫ぶ。いや、叫んだはずだった。それなのに、想いは声にはならず、かわいた叫び声が頭の中だけでこだまする。

『いい加減に 』

それでも聞こえたのか声はいらだち、より強く声が響き渡った。

『もともと君の方から、この世界に迷い込んだんだ』

そんなのぼくは知らない。この世界がどこかなんて知るわけない。ただ、ここはぼくと彼女が一緒に歩いた場所だ。

『なら、知らなくて構わない。力を抜き、眠るように去れ。そし

て、忘れてくれ』

いやだ。絶対にしないと叫ぶ。ぼくは彼女を探して、また会いに行く！

「って、あ」

声の反響が止まったその時、ぎしりという音が顔の真下から聞こえた。とっさに視線を下に、いやだめだ。首が動かない。だれかに、両手で首をしめ

「いた、い」

思考が止まる。苦しい。手をはなせ。息が、できない。

体をそらし、自分の手を前へと伸ばす。かすむ眼の前は真っ暗だ。誰の姿も見えない。けれど、いるはずだ。彼女をさらったやつが。ゆるさない。でも、その前に手をどける。

もがき続け、手を振りあげる。しめつける相手からはなれようと、だけど、届かない。振り乱す。届かない。ついに手は空をつかんで、だらりと下がる。動かない。もう動かない。

だめだ。死んでしまふ。助けて、お姉ちゃ

？

「夢か」

形のない悪夢を見ていた。片手で顔をぬぐい、ゆっくりと息をはく。そうして、あたりを見回すとさっきと全く同じ光景が広がっていた。どうやら一瞬だけ気を抜いたせいで、少しだけ意識が飛んでいたみたいだ。背にしていた木から離れて、再び熱気の中へと戻る。

「ふう……はあ」

それはうだるほど熱い夏の日だった。コンクリートの路面からは陽炎が立ち昇り、日差しは眩しく、しかし目を背けたくなるほど溢れている。まっすぐ届くはずの光の線は歪んで今見ている視界が現実とも幻とも区別がつかない。

そんな世界に僕は立っていた。歪んだ視界に立っている場所は揺

れているような気がするのに、そうじゃないのは足だけはしっかりと地についているからなんだろう。ここは街のはずれ。住宅街とも駅近くの活気溢れる商店街とも程遠い寂れた場所だ。眼の前に広がっているのは荒野、枯れた雑草の群れ。伸び放題になった木々の奥に見える小さな廃墟。僕の後ろにはビルがいくつか建っているもののテナント募集の看板しか窓には掲げられていない。ただの廃ビル同然、ここにあるのはそれだけだ。

まるで、何も残っていない。

僕は廃墟の前にまで歩を進めると、ゆっくりとその全体を見た。そんなに大きくはない平屋。壁は風雨にさらされたおかげで黒く汚れ、至るところが剥がれ落ちている。それと反対に扉は壁にはめ込まれたように今もまだしっかりと付けられていた。取っ手に手をかけても、びくともしない。もう、ここに棲みついている者もいないだろうに、今もまだこの家を守っている。いや、あるいは、

「このまま腐ってしまったのか」

少し離れて扉を蹴り飛ばす。それを何度か繰り返すと、見かけ倒しな音がして二つに割れた。思ったとおり、歪んだ壁のせいで動かなくなっていただけだった。本当は不法侵入なのを無視して中に入ると、ほこりの臭いが鼻を襲う。張り巡らされた蜘蛛の糸を手で払いのけながら部屋の真ん中へと進むと家具がそのまま残っていた。古いテーブルに椅子。そして、周囲の棚。それ以外に特に目立った物が見つからないのは何もないのではなく、何年もの間に積み重なったちりのせいだ。

視界は不十分なくせに、おまけに壁に空いた穴から光が差し込んでいる。きらきら輝いて、なんてミスマッチ。汚さをより鮮明にするだけだ。僕が思う廃墟の雰囲気とも夏の明るさとも全然違うズレ。これなら外にいろのと大して変わらない。この熱さも。歪んだ視界も。どんよりとした空気を払う気もなく、ただその場に立ち尽くす。汗の雫がほこりまみれの床に落ちた。僕の脳裏に早くここを出たいっという言葉がよぎる。もともと、ここに來たのに別に目的なんて

ない。意味のないただの寄り道だ。ああ、そう、それだけはあの時と全く変わらない。

「入ったことは覚えている。問題はその後だ」

かつてここで何かが起きた。そのことを僕は知っているのに、あの時にあった記憶がぼんやりとしている。今日ここに来たのはそれを正確に思い出すためだった。けれど、奥に入れば入るほど、「何もなかったのかもしれない」という思いが増してくる。ただ、僕はこの近くを通りがかっただけで夏の暑さに当てられたただだったと。そうして夜目覚めるまでここで倒れていただけなんだと。そんななんでもない話なのかもしれないという思いは決して嘘じゃない。誰かに会ったのは知っているけれど、それが誰なのかさえも僕には曖昧なんだ。その次の日にここに来たけれど、その時からこの家はもぬけの殻だ。

ため息をついて、ゆっくりと眼を閉じる。

ここを出たいという心の声を殺して、僕は立ったまま自分自身に問いかけた。ここに来た理由と今からすること。それをちゃんと言葉にし直して僕に投げかける。昔会った誰かがそう僕に教えたように。

まずは自分一人で思い出すことだ。これはきつとある夏の日の思い出、とかそんな内容の話じゃない。今では陽炎のように不確かな幻燈のお話、僕が僕である前のことだ。ただ、一つ覚えておかないといけないのは、僕だけの主観だと真実と違う点がある。だって、覚えていないからだ。もう一人誰か関係のある人がいないと話にならない。二つ目はその人を探すこと。……一応、どこにいるかはわかってはいるはずだけど。

眼を開けた瞬間にプリズムまき散らす光の中、奥の扉へ誰か子供が駆けだして行くのを僕は見た、気がした。いや、こんな世界じゃそれが幻か現実なんてわからない。ただその後を追いかけたくなつたのはきつと気のせいじゃないだろう。

汗がまた落ちる。さあ、そろそろ始めよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6416z/>

青い月の下で：夢幻螺旋

2011年12月21日17時51分発行